（様式２）

委 員 会 視 察 報 告 書

委 員 会 名	文教厚生常任委員会

視　察　地	白山市（石川県白山市倉光二丁目１番地）
調 査 項 目	・ファミリーサポートセンター事業 ・白山市こどもの居場所みんなの食堂事業補助金
調 査 目 的	今年度の具体的研究テーマの一つである「地域で支える子育て環境」について先進的な取組事例を調査・研究し、今後策定する提言書に反映させるため。
日　　時	令和５（2023）年 10 月 31 日（火）13：00～14:30
場　　所	白山市役所（議会会議室）
調 査 概 要	<u>●「ファミリーサポートセンター事業」について</u> 核家族が進む中、安心して子育てを行うために地域全体の協力が必要であり、子育ての手助けをしたい方と手助けをして欲しい方の双方が会員となる相互援助のためのしくみをつくり、お互いに助けられたりしながら、子育て支援するための会員間の橋渡しを行う事業である。 ◆援助活動の内容 １　保育園、幼稚園までの送迎及び保育等終了後の子どもの預かり ２　学校の放課後及び放課後児童クラブ終了後の子どもの預かり ３　冠婚葬祭、買物等、急な用事の際の子どもの預かり ４　習い事への子どもの送迎 ※ 預かる場所は原則として協力会員の自宅とし、集団保育は行わない。ただし、協力会員の承諾があれば、兄弟姉妹に限り一緒に預かることができる。 ※ 宿泊を伴う援助は行わない。 ◆援助活動の時間 午前７時から午後８時まで。 ※ 年末年始（12 月 29 日から翌年１月１日）は除く。 ※ 乳幼児の長時間（6 時間以上）の預かりは行わない。

	◆会員の条件 ・依頼会員（子育ての手助けが欲しい方）。 市内在住で生後 2 か月～12 歳（小学生）の子どもがいる方 ・協力会員（子育てのお手伝いをしてくださる方）。 市内在住で子どもの送迎や自宅での預かりができる方（資格は問わない）。 ・依頼会員と協力会員の両方を兼ねることもできる。 ・協力会員は、育児援助活動に関する知識を学ぶための講習を受ける。 **●「白山市こどもの居場所みんなの食堂事業補助金」について** 白山市では、子どもの貧困対策の一つとして、子どもの孤食を減らすとともに、身近な地域において子どもが安心できる居場所づくりにつながる「こども食堂」を開設している。 ・平成 28（2016）年度に社会福祉協議会に委託し、こども食堂を開設。 ・平成 30（2018）年度に補助金制度に変更、こども食堂ネットワーク立上げ。 ・令和 2（2020）年度に世代間交流の補助金加算を追加。 ・令和 4（2022）年度に名称「こども食堂」から「みんなの食堂」に変更。 ◆補助団体の資格 ・白山市内に主たる事業所を有する法人その他の団体であること。 ・「みんなの食堂」の事業運営を適切に行うことができる団体であること。 ◆事業の主な実施要件 ・市内において、主に市内の子どもを対象に食堂を開設すること。 ・子どもに無料又は低料金で食事を提供できること。 ・食事の提供が 1 回当たり 10 食以上であること。 ・参加者及びスタッフの傷害保険に加入し、安全確保に努めること。 ・料理開始前には必ず衛生管理チェックを行うこと。 ・食品アレルギーについて注意を払うこと。

視察の様子	 白山市役所にて 白山市議会議場にて
質疑応答	**質問１**　**頼会員の登録者数及び年齢層並びに利用目的の内訳について。** 回答１　依頼会員数は、226 名（年代別では 3～40 代が多い）、利用年齢については 7 歳が多い（年間利用者数 95 名）。利用目的の内訳では、学童保育の迎え及び帰宅後の預かりが 23 件、保育所・幼稚園等の迎え及び帰宅後の預かりが 20 件、保護者等の短時間・臨時的就労の場合の預かりが 18 件と多い。 **質問２**　**利用者及び協力者が偏らず、幅広い利用に向けた促進策について。** 回答２　いつも利用する方やいつも協力していただく方が偏ってしまうのが現状。幅広い利用に向けての事業周知は、市広報への掲載、人が多く訪れる公民館 23 か所に掲示、説明会の開催をしている。 **質問３**　**トラブルに対する協力会員への教育研修の実施について。** 回答３　子どもを預かる上で必要な知識や技術を学べるように計画している。 **質問４**　**協力会員数と両方兼ねている会員はどのくらいいるのか。** 回答４　令和 5（2023）年度現在ですが、協力会員 91 名、両方会員 38 名、全体で 355 名。 **質問５**　**白山市はとても広く山間地もあるが、依頼会員と協力会員のマッチングなどで苦労はあるのか。** 回答５　山間地では、なるべく近い方を選ぶようにしている。交通費が掛かるし、協力してくれる方が少なく、お願いしている現状がある。

	質問６　事業に対して、どう評価しているのか。 回答６　協力会員の少なさから、広く情報展開できない課題がある。協力会員の拡大を図っていきたい。 **質問７**　高齢者の利用実態について。 回答７　協力者は、地区社会福祉協議会や、ふれ愛サロンのメンバーで運営している団体もある。1 団体当たり 10 名程度。協力者の年齢層は、65 歳以上の割合が多い。令和 2（2020）年度 47 人、令和 3（2021）年度 145 人、令和 4（2022）年度 281 人と増えている。 **質問８**　「世代間交流」の取組詳細及び補助金への加算について。 回答８　取組の詳細は、ひとり親家庭、核家族、高齢者世帯が増え、子どもの孤食、高齢者の孤食になる状況をなくすために、子どもと高齢者が顔見知りになることで、地域との繋がりや、見守りになる。補助金への加算については、令和 2（2020）年度より 65 歳以上の高齢者との世代間交流を実施した場合、高齢者の参加人数により補助金を加算する。 **質問９**　みんなの食堂開設日における実施場所のスケジュールについて。 回答９　令和 5（2023）年度の食堂数は 10 カ所あり、開設日や実施場所については、運営団体に任せている。 **質問１０**　従前の実施団体との運営面での関わりについて。 回答１０　従前の実施団体に対し、事業に関する補助金を交付するとともに、公共施設を会場にする場合、利用料の減免を行っている。市や社会福祉協議会に市民や企業から食材等の提供があった時には、運営団体へ配布している。ネットワークで食堂運営団体の相互の交流や知識の向上を図るための研修会、みんなの食堂への理解や協力について広く啓発している。 **質問１１**　コロナ過における運営について。 回答１１　コロナ過の令和 2（2020）年度は、取りやめるところもあり２団体のみとなった。その後は、お弁当を持ち帰る対応をとった。石川県内の企業から弁当や食材の提供、うどんを作る工程の指導など協力をしてもらった。

	質問１２　フードバンクを実施している団体はあるのか。フードドライブの活動状況について。 回答１２　白山市での実施はない。白山市の社会福祉協議会及び公民館がフードドライブを実施している。
委員会所感	【春川敏浩】 ファミリーサポート事業は、依頼会員と協力会員との関係はとても良く利用者は感謝の声しかなくトラブルが発生した事案はこれまでに報告されていない。協力会員への教育研修は 24 時間以上の講習を計画し受講内容も有意義なものとして取り組んでいるが、研修会への参加者が少なく課題となっていることは気になった。市民への周知は広報誌や公民館、LINE と言った手段を講じ PR し行政のサポートが行き届いている。本市においても、丁寧なサポートを構築し事業内容が円滑に行くよう期待したい。 みんなの食堂は、社会福祉協議会に委託し当局は積極的に関与しサポートしている。子ども食堂からみんなの食堂に変更し、子どもと高齢者が交流することで、地域住民との繋がりや見守りの成果が浸透している。高齢者が参加することで補助金にも追加加算を設けている。近日中に新規に１か所オープンし 11 か所での運営となる。 本市においても、当局が積極的に関与し社協との連携を今まで以上に密にし事業の構築を図って欲しい。 【五位野和夫】 1　ファミリーサポートセンター事業について ・多くの自治体が類似する事業に取り組んでいるが、協力会員の確保及び利用者と協力者が偏らないようにすることが共通の課題であり、柏崎市においてもこの点は周知や広報によって事業の理解を進めることが必要と感じました。 ・市内全域での利用の促進については地域性の違いがあるが、市としての支援事業があり、その情報を市民が共有することが大事だと思う。 ２　白山市こどもの居場所みんなの食堂事業補助金 ・全国的に子どもの貧困対策から地域住民の居場所づくりに目的が移行しているようだが、貧困対策は別の形で依然として必要である。 ・居場づくりの効果がある反面、高齢者のサロンとの住み分け

	が課題となってきたとの事であり、所管部署の横断的な対応が求められる。 ・補助金申請が通った団体へは決定額の８割を限度として、最初に交付したり、公共施設を会場とする際の利用料の減免など市の積極的な関わりが感じられた。 ・企業の協力を得られたことは居場所づくりに事業に限らず、市の働きかけの努力の結果と考える。 【上森茜】 ファミリーサポートセンター事業では、役所の職員が各コミセンに出向いて事業の説明、協力会員の募集を積極的に行っていたのが印象的であった。協力会員の中には以前お世話になったからと言う理由で会員になっている方もいるとのこと。会員の声として自分の家で自分の子どもと預かる子どもを遊ばせられるので良いと言った利用者の声を紹介されていたがこれなら自分でも協力できるという人様の子どもを預かることのハードルを下げる事例の紹介があったが、こういった率直な感想は柏崎市でも是非取り入れ、特に協力会員を増やすことに注力するべきでる。 子どもの居場所みんなの食堂事業補助金では、子どもの食事だけではなく地域の高齢者も結びつけていることに地元の子どもと高齢者のつながりも生むことができて大変良い事業だと感じた。また、企業も積極的に子ども食堂には協力的な印象を受けた。 【重野正毅】 ファミリーサポートセンター事業では、まず提供会員を増やしてから事業拡大を図るとしていた。まさに手順通りに着実な方向だと感じました。児童クラブや保育園の延長保育と連携させたファミサポとの考えではないとのことなので、そのように進めている柏崎はより俯瞰した取組になっているのかもしれません。白山市としてファミサポを肯定的にとらえている市民が多いというのは、市としての関わりや広報が行き届いているためだと思いました。みんなの食堂では、その発足が市民や議員の声からでなく、平成２８年に当局自らの発案によるものとのことでした。新しいものへ挑んでいく当局の姿勢、社会情勢を的確につかんだ取組は素晴らしいと思いました。現在は子どもだけでなく、高齢者まで広げた取組になっており、また、食だけ

	の提供ではなく、扱うものの広がりもあるようです。市としても補助金の幅を広げていて、市の本気度を感じました。 【星野幸彦】 ファミリーサポートセンター事業について、手助けをする協力会員と手助けを必要とする依頼会員をマッチングする同様の事業については柏崎市でも実施されているが、共通の課題は協力会員の確保やマッチングである。その点白山市の事業の進め方は、まず協力会員の増強に取り組んだ後、事業を拡大すると言う考え方であった。そのため事業の周知に力を入れた効果により、ファミリーサポートセンター事業に対して好意的に捉えている市民が増えた。今後協力会員、依頼会員とも増え事業が安定、成熟するのではないかと感じる。柏崎市においても地道な周知活動の継続が必要であると感じた。 こどもの居場所みんなの食堂事業補助金について、全国的にコロナ禍の影響で、食事ができない子どもの救済のため子ども食堂が急増していると言う報道も聞かれる中、地方においては食事の提供＝貧困と言うイメージがあり、むしろ孤食と言う問題の解決のためと言う位置づけに近いといったところでお年寄りも含めた『みんなの食堂』を展開している。 世代間交流、居場所づくりについては参加人数はかなり増加している。 某中華チェーン店事業者など複数の企業がこの事業に理解を示し協力が得られたことは、市の働きかけや実施事業者の努力の賜物と感じた。 【西川弘美】 ファミリーサポートセンター事業では、課題として利用者や協力会員の偏りや、協力会員の少なさを市民に広く伝えられていないこと、また、協力会員の知識・技術向上に向けて研修を実施するも、参加者が少ないことが挙げられていた。これら課題の打開策として、市民への周知啓発活動の他、教育研修をファミサポ以外の方へも公開し、それを通じて協力会員につなぐ取組を始めている。当市も似たような課題があり、具体的な手法として参考になると感じた。 こどもの居場所みんなの食堂事業補助金については、立ち上げ当初から行政と委託団体とが常につながり、その時の状況に合わせて世代間交流や財政面での見直しを行っている。世代間交

	流の補助金を加算したことで高齢者の参加者が増えているものの、“子どもを中心に交流する”という目的はぶれずに事業を行えているなど、行政の一貫した姿勢と委託団体との連携の良さがうかがえた。 【三嶋崇史】 白山市のまちづくり基本理念は、市民一人ひとりが生涯を通じて心身ともに「健康」で活躍し、まち全体が「笑顔」あふれる「人が元気」「産業が元気」を目指している。人口が約１１万の自然豊かな市である。研究テーマである「地域で支える子育て環境」が、市を始め社会福祉協議会、企業、各団体の協力、連携のバランスがとても良いと感じた。こどもの居場所みんなの食堂事業の取組も、コロナ過で利用者の減少は仕方ないことだが食堂数は年々増加傾向にある。実施回数の関係性も理由の一つだが、食堂運営団体に関わる人、実施場所、利用者への配慮、周知方法がとても効果的に働き、運営団体との交流、情報の共有が利用者の増加につながっている。基本理念である「笑顔」があふれているからこそ、地域や世代を超え市民の強いつながりのなか事業がうまく機能していると感じた。